

第43回 在日朝鮮学生美術展・出雲展に参加した鳥取大学学生等の感想

(鳥取大学4年)

学美について振り替えると、あの2日間で多くのことを知り、自分と向き合うきっかけを得ることができました。また、あの2日間だけでは、作品を見ることができなかつたと感じています。それは単純に作品数が多いということもあるかもしれませんが、それだけの理由ではないと思います。作品ひとつひとつの主張がそれぞれに感じられ、それらを一日では全て見ることはできないと言ったほうが正しいのかもしれませんが。作品に限らずその作品を引き出す先生方にも強いパワーを感じ、これが人の心をうごかすのか、と感心しました。

そもそも、専攻研究の分野が違う私が学美に興味を持ったきっかけは、仲野先生から頂いたポスターに単純に「面白そう」と感じて参加をきめました。「面白そう」というのは面白半分ということではなく他の美術展とはなにか違う匂いがしたからです。しかし、その勘は、的中したようで、搬入の手伝いの時から、一つ一つの絵を飾る時に気分が悪くなった私がありました。絵の一つ一つに立ち止まらざる負えないメッセージが詰まっていると感じたからです。正直、あの時、人ごみに酔うように、子どもたちの作品に酔っていたと思います。一つ一つに強いメッセージが詰まっているようだ、と先ほど申しましたが、絵に人格があるように感じたといった方が正しいかもしれません。私は絵を描くことが好きなので、普段から絵を描きますが、小学生のころの私はこんなに自由に絵を描いていたのでしょうか。「小学生こんな発想をする子どもが存在するのか！」と驚かされました。また、中央審査会の先生方のお話を聞いても私が絵を見て感じたことも、子どもたちの発想が大人たちを悩ませるのですから、そこに上下関係がないように感じて、先生と生徒の関係が面白いな、と感じました。そして、どうしたら、子どもたちの発想が自由に生々しく引き出せるのか先生方の取り組みがとても気になるところです。



この美術展では、幼稚園から高校3年生までの絵が見られましたが、子どもたちの発想力や創造力の成長が感じられて、またそこから先生方の教育の取り組みや熱意も感じられそこが他の美術展とは違う感じがしました。この展示の仕方はすごく面白かったと思います。また先生方が絵の解説をされましたが、これもとても面白かったです。1人として同じ解説がなかったからです。特に印象に残っているのは、入学式の絵の解説(タイトルがうる覚えなので、絵の感じで言うと赤い華吹雪が舞うような、奥に入口が見える絵)です。「こ

この華吹雪は緊張で昂揚している気持ちを表しているようですが、あの門をくぐったら後戻りできないような・・・」という解説には、「そんな見方があるのか！」と感心させられました。後にカン先生が同じ絵を解説された映像を仲野先生から見せて頂きましたが、まったく違う解説で、「あれ？」と感じまし

た。ここに日本の教育と大きな違いがあると思いました。先生 1 人 1 人がマニュアル化していないというか、子どもが表現しようとしていることを見ようと一人一人が努力している姿勢が感じられました。解説を聞いていると、先生方の子どもを見る感性はどこで磨かれるのだろうと思います。

展示会では「人生」というタイトルの作品の作者セランさんの解説を聞きましたが、自分の意見をしっかり持たれていて、私よりも大人だなどかんじました。高校生でこんなに語れる人は日本人には少ない気がします。セランさんは自分のことをきちんとして語り語れる人だと尊敬しました。また、セランさんの作品について何人か質問されていましたが、セランさんの意見は、ぶれることなく自分が作ったイメージを正確に、確実に相手に伝えようとする姿勢は見習わなければならないと感じました。

懇親会にも参加させていただいて、まず驚いたのは乾杯の回数の多さです。私の就職も祝ってください、とてもうれしかったです。こんなに、温かい懇親会は久しぶりでした。私は飲み会があまり好きではないのですが、なぜかその懇親会は楽しかったのが印象的です。初めて会う方ばかりなのに、あの温かさや賑やかさは家族のような感覚でした。私の幼い頃の村の子ども会や運動会の慰労会みたいな懐かしい感じもしました。私は朝鮮学校には行ったことがないのでその中のコミュニティーがどんなものかわかりませんが、少なくとも学美の中のコミュニティーの温かさや団結力は、朝鮮学校の美術教育に繋がる一つの要素だと感じました。私が知っている学校の先生はこんなに大人数で賑やかになることを見たことがないので、そこも私たちのコミュニティーと違うのだろうと感じています。



学美を通して、私は漠然と「すごい、すごい」と思っていました。1 カ月ほどたって「なにがすごいのか？」を考えてみると、本来の美術のあり方がそこにあることだと思います。美術に限らず、先生と生徒の関係もそれらを取り巻くコミュニティーも、ありのままの姿だなあと感じました。「それがすごいと思える自分はどうか？」それが見え始めてから、「制度に頼り切っている私」に気付き、私は制度の中での優等生になるために頑張ってきたように思えました。「本来の自分は何のために生きるのだろうか？」「どう生きたいのか？」

よくわかっていない私がいることが少し怖いです。まさか学美で自分の危機を知るとは思いませんでした。セランさんのように私は自分のことが説明できません。「黙っていることが正しい」という考えが身にしみついていると思います。私の周りの人々もそういった人が多いと思います。ですからミーティングなど討論する場所では討論になりません。私は、このままいくと人の顔色をうかがい、発言力を失い、誰かに操作されロボットのように生きてくきがしてとても怖いです。この学美で搬入から懇親会まで参加して、発言や発想力、創造性を大切にしている場所が日本にあるということが、すごいと感じたし、それが私たちの社会にも反映されたいのに。と思いました。発言したい人や自由に創造したい人は隠れているだけでたくさんいると思います。この学美をきっかけに社会問題の枠を越えて表現

の場でいろんな人が自由に表現し切磋琢磨するコミュニティーができればいいなと思います。

しかし、在日朝鮮人の問題が朝鮮人学校の存続に影響しているのは、悲しいことです。日本人の私としても複雑です。個人個人だと人種や社会問題で争わないのに国同士になるとなぜ、大きな争いになるのか？それが個人をも巻き込んでいるのが悲しいです。社会問題に関して他人事だった自分も理解を深めようと思ったし、学美をきっかけにいい意味で危機感を持ち、自分の生き方、表現のやり方を考えていこうと思えました。学美が開催されることで、救われる人はたくさんいると思います。少なくともわたしは元気になりました。

当たり前のことが混沌としている今、社会の発展とともに私たちは大切なもの失ってしまったと思います。それを見つめなおす、またそれに気付くきっかけに学美はなると思いました。今回 1 回だけでは分からなかったことや見られなかった作品が多かったので機会があればまた見に行きたいと思います。

感想文に加えて

今回、参加費用から、懇親会など学美を通して大変お世話になりました。本当にありがとうございます。費用以外にもたくさんものを学び、いろんなものを吸収できました。感謝のしようがありません。おそらくこの感想も、まだまだ理解も乏しく薄っぺらな意見かと思えます。しかし、これをきっかけに在日朝鮮人問題について理解を深めようと思え、学美の理解に努め、学美を応援したいと思っています。



来春から社会人になり仕事もはじまるので、都合上絶対とは言えませんが来年の学美も見に行きたいです。楽しみにしています。そして、そこでまた皆さまに会えることを願っています。

貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

(鳥取大学 3 年)

学美展に訪れたのは、これが 4 回目です。初めて訪れたのは米子展の時、私が 1 年生の時でした。迫りくる作品に圧倒され、そしてそのあとの懇親会でとても話しこんだことを覚えています。それからどうしてか何度も足を運ぶことになり、自分でも驚いています。今回の学美も本当に楽しかったです。特に懇親会では心から笑い、楽しみ、あっというまの時間を過ごさしてもらいました。きっと私と同じように、みなさんも心から楽しい時間だったのではないのでしょうか。

懇親会の最中に、こんなに心から楽しいのはいつぶりだということを、ふと思い出してみると、なんと 6 月の岡山朝鮮学校での運動会ぶりだと気付きました。勘違いして欲しくないのですが、私は普段、

別に笑わない性格でもないし、極度に引きこもる性格でもないし、友達を誘ってご飯を食べに行くなど、それなりに楽しい日々を過ごしていると思っています。ですが、その普段の楽しいと学美の懇親会や運動会での心から楽しいはなんだか違ってきます。運動会の時に書いた、私の感想レポートを読みなおしてみました。私は、みんなの大きな力におされて、楽しむことができたと書いています。私たちは普段、とても気を使いながら、人を厳選して“みんな”をつくり上げているように思います。そしてその中でまた気を使って、人に合わせながら笑いあい、楽しさを作りあげています。偽りの楽しさだと言い切るつもりはありませんが、私たちの多くは、誰もかれも一緒になって力いっぱい楽しむということを、その方法を忘れてしまっているように思います。岡山朝鮮学校の運動会では、みなさんの一緒に、“みんな”で楽しむ力に私も引き込まれて、そして心から楽しい時間を過ごせました。懇親会の時に自己紹介を聞いていてびっくりしたのですが、みなさんが元から知り合いだった人というわけではなく、飛び入り参加や、はじめましての人、いろんな人がいました。私たちはルーツも違います。普段一緒にいるわけでもありません。ですが、“みんな”で楽しみました。お話するのも、自分の意見を言うのも、本当にどうでもいいことで盛り上がるのも、笑いあうのも、本当に本当に楽しかったです。



作品一つ一つと向き合う時間もとても充実していました。今回観た作品たちは、実は秋に神戸展で一度観ていたのですが、全く飽きもせず、今回もじっくり見させてもらいました。ここで私のつぼに入ってしまった作品たちをいくつか紹介させてください。まず「いたさ」という作品です。いろいろな痛みが伝わってきました。こぶしからの直接のいたさだけでなく、悲しさ、怒り、そして努めて耐えようとする、いろいろまじったいたさがあるように感じました。次に「はたらくお父さん」という作品です。私が作者と同じ小学2年生の時、「足の曲がり方がおかしい」という理由で作品をなおされたことをふと思い出し、愛着がわきました。最後に、「水際のかに」という作品です。これは神戸展の時からなんだかおもしろくて、一番心に残っていました。もしかして適当に切っただけだな、と思わせる紙をかのにしたてあげ、たくさん、丁寧にあぶくを書いています。どうしてあぶくをこんなに丁寧に描いたのか、聞いてみたいです。

もちろんその他にもたくさんの作品が心に残っています。今回アンケートがあり、審査員のような感じで作品を何度も何度も拝見しました。もちろん素人ですが、選ぶのは本当に楽しかったです。他の方からどんな作品が挙がったのか、聞いてみたいような、プレゼンをしてもらいたいような気持ちでおります。

4回目とはいえ、良い意味で今回も作品を見るのは疲れしました。もう一度書きますが、作品一つ一つと向き合う時間はとても充実しています。あつという間の時間です。充実を感じるときってどんな時だろうか、と考えてみて、最近読んだ本のフレーズが思い浮かびました。その本では、他者との関係性を構築した時と書いてあり、私はなるほどなと思いました。作品一つ一つと向き合う時間は、まさしくそのような時間だったのではないのでしょうか。私は以前、学美のコメントペーパーに、作品の中に私がいるようだ、と書きました。他者の作品から見える私と私がつながる、そしてその見える私を通じて、作者、他者へとつながっている。だから充実を感じているのではないのでしょうか。私は言ってる自分なので意味が分かりますが、他人からしたら意味の分からない文章だと思えます。しかし、学美を観られている

みなさんなら少しはわかっていたけるのではない

でしょうか。(説明からうまく逃げていてすみません) 学美ではたくさんの私がいるのでそれは確かに疲れますが、自分が私と、そして作者と他者につながっている時間なので、充実した時間なのです。充実感はいわば、幸せです。幸せを感じられる作品たちって本当にすごくないでしょうか。プロの作家でもなく、この子たちの作品が、そのような作品なのです。懇親会中も学美はすごい、と何度も話にでました。学美のすごさは、作品からあふれでているように感じます。



今回もたくさんの元気を頂き、ありがとうございました。これに尽きます。またお会いしましょう。本当にありがとうございました！

(鳥取大学地域学部 1 年)

学生美術展について

私は正直なところ、芸術や美術といったものはわからない。しかし、素人目にも学生美術展の作品が日本の学生がつくる作品と違うものであることを感じた。どの学年の作品も制作している姿が想像できるような作品であり、表現するものが多様であった。例えば、同じテーマであっても表現されているものが全く異なるものである作品が多く存在した。また、学年順に絵を見ていくと、学年があがるにつれて表現の仕方が自由であるため作品に懸けられた思いが強く、形として表れているように感じた。その作品を作った本人が普段から何を考え、何に関心を持ち、何に悩み、何を表現するために作品を制作したのかが伝わってくるようであった。

学生美術展の作品を見ていると自然と自分の学生生活の中で受けてきた美術の授業について考えていた。日本の学校では決められたやり方でいかにうまく、そして、期限内に終わらせることができるかということが重要視されているように感じる。学校の中ではそのことが当たり前になっていたように思い

だされる。わたしにとって美術の授業とは自己を表現するものではなく、大人が求めている絵をいかに省エネルギーで効率よく、描けるかを考えるものであった。出来上がった作品に対する思い入れもあまりなかった。

美術の授業というものにそのような考えを持っていたからこそ、学生美術展の作品に対する驚きは大きかった。メッセージ性が強く、エネルギーに満ち溢れており、その作品にかけた労力のおおきさが作品からうかがえた。また、日本の学校教育の中では嫌煙されがちなテーマについても強いメッセージが発信されていた。わたしの学生生活では教員も学生もほかの教員や保護者の目を気にして、有耶無耶にしてしまう空気があった。そのような閉塞感も学生美術展の作品からは感じなかった。



学生美術展を支える方々について

今回の学生美術展に参加させていただいて強く感じたのは支える人達の真剣さである。絵の配置や学生美術展 IN 出雲における賞を設けるか否かというような議論においてもその真剣さが伝わってきた。「一言いいですか？」という切り口で話し始めると思いが溢れ出し、一言では決して終わらないという現象もよく見られた。和やかな、楽しい雰囲気であったが、それぞれが熱い思いを持っていることが伝わってきた。美術展の方向性などについて議論する際の真摯かつ地道に取り組む姿勢が私にとってとても印象的であった。物事と向き合う姿勢としてもこのような姿勢はとても重要であり、生きていくうえで大事にしたいと感じた。

自分の課題

私の高校時代の友人に在日朝鮮人の友人がいる。その友人はあるとき私に、在日朝鮮人であることを伝えてきた。その時、私はそのことを特に意識せず、「ふーん、そうなんだ。」という感想しか持っていなかった。高校生の私はほとんど在日韓国人の人々について知らなかったのだ。大学に入学し、学び、その時にその友人の気持ちをはじめて想像することができるようになった。もし、学ぶ機会や出会う機会がなく、誤った見方に感化されていた場合、現在問題にな

っているヘイトスピーチに参加していた可能性も、友人を軽蔑していた可能性もあったかもしれないと考えるとぞっとする。学ぶことや出会うことをせず、誤った見方をする環境にいた場合、誰しもが誤っ

た価値観を持つ可能性がある。また、その環境は社会によってつくられることもあり、非常に厄介である。社会が誤った価値観を形成しているなら社会を変えなければならない。

私自身勉強不足であるし、分かっていないことも多くあり、自分の意見があまいことも自覚しているが、今の社会の理不尽さをどうにかしたい、何か自分が役に立つことができないかと感じた。今までは社会は変えることできないと諦めていた気持ちがあった。しかし、社会を変えることができるかはわからないが地道に取り組むしかないと感じるようになった。問題はセンシティブで難しい。だからこそ真摯な態度で粘り強く地道に取り組んでいきたい。



粗末な文章ですみません。

二日間、本当にありがとうございました。

最後に

今回の学生美術展にはスタッフとして、お手伝いさせていただくということであったが、実際はお世話をさせていただくばかりで、さらには学ばせていただき、申し訳ない気持ちと有り難い気持ちでいっぱいであった。今回のことで色々な人から頂いたものを将来しっかりと返せるように学び、努力していきたい。

(鳥取大学 学生)

初めて学美を見た。

展示を手伝った人が熱っぽく語り見せてくれた一枚の作品。太陽の塔のコラージュ。私の中の「子どもの作ったもの」の範疇を超えている。

なんだこれは。話を聞くと、そもそも美術の授業が日本のそれと違うらしい。

見に行かないと。翌日3時間車を飛ばす。

到着した会場（階下）に見えた光景は、今まで見慣れた「生徒の作品展示」と違うのが一目で分かる。近づいて見ると似た作品がない。一見何かわからない絵も多い。タイトルが個性的。『僕の家族がカタツムリになっちゃった』。説明をして下さった先生が、「写実性」ではなく、いかにその時の「感情」を表せているかを重視していると言っていた。たしかに『ずる』という作品では、ユーフォーキャッチャーでずるした人を見て「ずるい!!!」とわめいている人の気持ちがよく表れていた、思わず笑った。

私の中の美術の授業の記憶。思い出すのは「模写」の時間。大好きな「真珠の耳飾りの少女」を選ぶ。下書きのデッサンはまずまず。次に色塗り。あれ、肌の色が違う、あの黄色が出ない、あの青色が出な

い。誰に何を言われたわけではないが、完成した模写は、本物と似て非なるもの。自分の色塗りのセンスのなさががっかり。大好きな絵だったのに上手く描けなかった。上手く描けた人がうらやましい。

学美では上手さは評価しない。生徒の描く絵はどれも表現豊か。描く技術を教えているわけではなく、「いかに熱中して描く気（テンション）にさせるか」だという。描く気？そう言われれば、私の学生時代の美術の時間は、「したいかしたくないかに関わらずしなければならないもの（to do）」だった。そこに自主性・主体性はない。もちろん朝鮮学校でも大卒では授業なのだから100%自発的ではないだろうが、そこに関わる先生方に「させよう」という意識はない。美術の先生は「Teacher」ではなく「Facilitator」だという先生もいた。

ある先生が、もし生徒が「きれいな絵」を描いたら、なぜ自分はこんな平凡な絵を描かせてしまったのかと反省すると言っていた。子どもがきれいな絵を描いたら、私ならきっと「お～上手いじゃん、よく描けてるじゃん」と言う。朝鮮学校の先生方はきっと言わない。

「既存のものを再現しても意味ない」、「なんじゃあこりゃあ」という絵を評価していると言っていた。いかにはみ出しているか。

「違う」ことの肯定。



個人的に、人と違うことの違和感と、自分と違う考えの人を受け入れられないことへの行き詰まり感があった。「みんな違ってみんないい」という名詩があるけれど、人と違うことは「いい」と思えないことの方が多い、自分と違う考え（相容れない考え）の人に出会い分かり合えない時は苦しい。何かヒントはないか、そんな時に「鶴見俊輔」のことを人が紹介している文章に出会った。

鶴見俊輔は「自分と違った考えの人がいて良かった」という思想の持ち主、と書かれていた。

これは、自分が人と違うことも、人が自分と違うこともどちらも肯定している。この時から鶴見俊輔がどんな人物が気になった。調べていくうちに、鶴見俊輔と私の決定的な違いを見つける、「戦争の経験」。戦争と先の思想を結び付けると、違う考えの人間がいて良かった、という考えはつながる。私は戦争を経験していない。頭では分かってても、感覚として「違う人間がいて良かった」とやはり思いきれない。なかなか核心に近づけない。

そんな時の学美だった。詩ではなく、思想ではなく、人と違うことを肯定（実践）している人（先生）たちが目の前にいた。

質問をしまくる。

そこで、ある先生から絵を描くにあたって「お前にとって〇〇（絵のテーマ）とはなんぞや」という生徒の言語化を大事にするという話があった。それが言語化できるまで、とことん話し合う。言葉にできたらその向こうへ行けるという。



（言語化かあ。言語化の苦手な私は、またひとつ理解の難問だ。それはさておき。）

生徒の「描く気（テンション）」、テーマの「言語化」、その結果として出来上がる作品の多様性。

朝鮮学校で感じた違いの肯定は、その人の本当にしたいことを尊重している。

「させられていないか」「他者基準でしようとしていないか」に注意し、「自分の感情に忠実か」重視している。

そこでますます気になる、なぜ朝鮮学校ではこのような美術の授業が実践されているのか、され始めたのか。そもそも朝鮮学校とは。知らないことが多すぎる。

今、在日朝鮮人のことについて書かれた本を読み始めている。

来年は鳥取に学美が来るらしい。来るべき日のために、また質問をためておく。